

## 彙報

○早稲田大学史学会・連続講演会

「私が歴史を学びはじめた頃」

(於文学部校舎)

第一回 平成十四年六月二十六日(水)

中国史学事始 近藤 一成(東洋史)

西洋の歴史を学ぶ意味

野口 洋一(西洋史)

第二回 平成十四年七月一日(月)

近代史への開眼

由井 正臣(日本史)

早稲田の考古学と登呂の合同発掘調査

岡内 三眞(考古学)

趣旨と経過

李成市

早稲田大学史学会では、昨年に引き続き、早稲田大学文学部学生を主な対象とする連続講演を六月末から七月初めにかけて、二回にわたって開催した。その主眼と

するところは、歴史学に対する学生の興味・関心を啓発することであり、今回は共通テーマを「私が歴史を学びはじめた頃」に設定した。各回とも二人の講師の講演で構成したが、そのねらいは、これまで歴史学の研究・教育に携わってきた教員が、歴史学研究をめざした動機や、その時代背景を、個人史として語りかけることによつて、歴史学研究を身近に感じ取ってもらい、歴史学に対する関心を喚起することにあった。参加の呼びかけ文は、次の通りである。

「いま教壇に立つ先生方も、かつては皆さんと同じ文学部の学生でした。長年、歴史研究に携わってこられた先生方が、これまでの研究生活を振り返りながら、歴史学のおもしろさについて皆さんに語りかけます。」

第一回目の六月二十六日(水)は、四限にあたる一四時四〇分から一六時一〇分まで、文学部三六号館三八二教室で開催した。参加者は、約一二〇名。

第二回目の七月一日(月)は、二限にあたる一〇時四〇分から一二時一〇分まで、三八号館A V教室で開催した。参加者は約一〇〇名。

今回は、教員の参加も多数あり、学生たちの質問と共に、講演に対する教員のコメントが述べられるなど、教員と学生の議論の場になった点は一歩前進であった。今後もテーマの設定や講演の内容に工夫を加えながら、日本史、東洋史、西洋史、考古学、四専修の協力の下に歴史学への関心を高めていく入門講座となるよう努めたい。

### 〈第一回〉

中国史学事始

近藤 一成

私が、一文東洋史学専修に入学した一九六五年は、専修別入試が行われた最後の年であった。従って中国史を勉強しようと思ったのは高校三年のときということにな

る。日本を知るためには中国の歴史を知らねばならないという以外、多分、東洋史を選択した大層な理由はなかったと思うが、周りからは随分変っていますねと言われたことが記憶に残る。変っていたかはともかく、大変なことになったことは確かであった。この年、アメリカは北ヴェトナムへの爆撃を開始し、韓国はヴェトナム派兵を決定、日韓条約が結ばれ、日本は直接出兵しないものの米軍の後方基地としてヴェトナム戦争に大きくかかわっていった。東アジアが大きく動くなか、ヴェトナム反戦運動の大波がアジア史を学ばんとする新入生を待っていたのである。講師のある先生は、反戦のバッジをつけて出講されていた。秋には早稲田の第一次学費学館闘争が勃発し、以後、全共闘運動を挟み、大学院出るまでの約一〇年間、大学が一年を通して平穏であったことは余りなかったように思う。そして、それ以上の激動と惨劇が専攻として選んだ中国で起こっていた。

毛沢東の指示による、著名な明代史家呉

晗の歴史劇『海瑞免官』の批判論文公刊を狼煙に、翌六六年、正式に「社会主義文化大革命」が発動され、中国は後に言う「一〇年の大乱」に突入していった。「竹のカーテン」の向こうの動きは容易に知ることはできず、公式発表による永続革命、近代を超える革命、魂にふれる革命などなどのスローガンをまともに受けて文革礼賛の論文を書く者、現実に背を向け実証の蝟壺にこもる者など学界の反応は多様であったが、多くの研究者は現実との距離を測りかね、まじめに混乱していた。さらに若い学生・院生たちは「造反有理」の流行のもと、それに輪をかけて混乱していった。今思うと、院生時代に中国留学が不可能であったことと、「造反有理」の強力ウィルスの洗礼を受けたことにおいて私たちと僅か三、四年後の学生たちとは何か決定的な違いがあるように感ずる。要するに、私はいまだもってその混乱を引きずり、また理想と現実があのように壮大な乖離をする中国の歴史は何なのかという課題に引きず

られているのである。

ヴェトナム戦争によりアジア研究の必要に迫られたアメリカは膨大な予算を投入して研究を推進し、研究者を養成した。今、その成果が私と同世代による世界をリードするアメリカの中国学として現れている。文革後三五年を経た中国は、近代以降初めての学術隆盛の時代を迎えている。その狭間にあつて「世界に冠たる日本の中国学」をかつて自他共に認められわれ日本の学問的伝統を如何に受け継ぎ、復権させるかは、皆さんの双肩にかかっているといえよう。

### 西洋の歴史を学ぶ意味

野 口 洋 二

中学の頃から興味をもったのは何故か西洋のことばかりだったような気がする。だから大学に入る時には迷わず西洋史を選んだが、その頃は研究者になろうなどは夢にも思っていなかった。本当に勉強しようと思ったのは、学部三年の時に、恩師鈴木